

月曜日新聞の発行者桜木半治さんに、発行者としての思いや当時のまちの思い出について話を聞いてみました。

旧早来町に移住すると決断した後、3、4月と旧早来町に行つて家を探したが良い物件がなかったので、人を介して空き家を探しました。安平に行つたとき、土田耕啓さんの紹介で久米板金の久米実さん所有の一軒家が見つかり、そこを活動の拠点にしました。久米さんは、大きな看板月曜日新聞社を作つてくれて家の屋上に設置して、私の活動を応援してくれましたね。

旧早来町と旧追分町が合併すると決まつて、町の協力を得て安平地区でふれあい農園の活動をしたことがあったんです。緑豊かな自然を満喫し、家族揃つて畑作りや花作りを楽しくやつていき、色んな人との交流をした上でまちづくりの機運を高めていこうという目的でした。花はもちろん、カボチャやジャガイモなどたくさん野菜を育てていたと思います。収穫祭がありましたので、旧早来町長や知り合いの方にも来ていた

きました。馬だけではなく、北海道の農業を知ってもらいたいという思いから近隣地域の方々、私の知り合いに声をかけたりしました。この思い出が一番印象に残っていましたね。

月曜日新聞を知つて貰うために、いくつかの話題を紹介します。

紹介するのは、自然塾、北海道ミュージックフェスティバルと夢の丘プレイボール館。これらすべてが谷村琢哉さんという方が当時中心となつて活動をされており、まちの出来事として知つてほしいなという思いです。

これらの話題について、谷村琢哉さんに当時のことであつたり、まちの思い出について話を聞きました。



谷村琢哉さん

印象に残っていること

夏の夜空にいつも当たり前に見える「天の川」や、湿地にひっそりと咲く美しく白い「ミスバシヨウ」が心に残りました。素晴らしさをまちの人に伝えたいときに、こう言われたことを覚えています。「当たり前だべさ、どこにでもあるでしょう！」と。そんな当たり前を素晴らしさも当たり前にしてしまつて残つていけないという気がしてしまいましたね。素敵なことを素敵と言え、素晴らしきものを素晴らしきと言えることは大切なことです。天の川が綺麗、ミスバシヨウが素敵だなと思うことが財産であつて、素敵だと思わないと残つていけないと思つし、素敵だなと思つるのは素敵だと思わないといけない自分が思ふことではなく、あの

東京都出身。大学時代のときに、さまざまなまちの人と出会い、吉田牧場やノーザンホースパークで体験した暮らしが心に残つて北海道で暮らしたい憧れを持つ。高校野球の西東京大会の決勝戦で負けたが「人生で準優勝の準の文字を取ろう」と決意し、特に仲の良かった日暮孝男さん、大橋博範さんとともに旧早来町に移住。

あびらの思い出

頃まちに来たときに思いました。思わないと無くなつてしまふものです。そういう気持ちで最初に芽生えました。

NHKのど自慢の予選大会が旧追分町に来ることを知り、参加したことがありました。それをまちの人に勧められて「面白いから出てこい」と後押しされ、エントリーしました。合格すれば本選に進出できるのですが、見事に予選で鐘を鳴らされて予選敗退



NHKのど自慢予選大会の様子 (平成5年広報おいわけ9月号)

してしまいました。そのとき初めて生演奏で歌ったのですが、とても音が取りにくいと思ひました。全力で歌ひましたが、自分たちの歌がひどいくオリテイだったなど。旧両町の合併に先駆けて両住民が一体感を醸成させられるような目的で「えん」というチームを作りました。企画として、バスツアーを行い、良いところを若い人たちが町民に見てもらい、交流会をするもので、みずほ館や株式会社コクボ、旧追分町は鹿公園などを回りました。初めて会う旧両町の住民同士が緊張しながら1日を過ごしていましたが、段々明るくなり、最後は笑顔と充実感が溢れましたね。合併はスローガンや掛け声だけでなく、住民が参加し、ともに時間を過ごさないと生まれないと実感しました。鹿公園の睡蓮、動物たちを見て以降、頻繁に仲間や大切な人を連れて鹿公園に行くようになりました。実際に体験し、行動すること、それが北海道ミュージックフェスティバルやえんの大切な核になつていたと思ひます。